様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５年　４月　１　日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２３３００４５
研究課題名（和文）　「1968 年」と現代デモクラシーの形成に関する比較政治学的研究

研究課題名（英文）　1968 and the Making of Contemporary Democracy

研究代表者
野田　昌吾（NODA　SHOGO）
大阪市立大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：50275236

研究成果の概要（和文）：本研究は、1960年代の異議申し立ての噴出＝「1968年」について日欧米比較を行ったものである。近年「文化革命」としての性格が過度に強調される「1968年」であるが、本研究は、「1968年」は各国における政治的社会的近代化のあり方と冷戦的秩序のあり方の問題性を告発することにより、各国の戦後秩序の再編の大きな契機となったばかりでなく、冷戦的な国際秩序の再編を促す一つの要因ともなったことを確認し、その「文化革命」性の一面的強調の問題性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is a comparative research on the contestations of the sixties, the so-called “1968”, in Japan, Europe and the USA. The “1968” is nowadays almost understood as the “cultural revolution”, but our study reveals that such one-sided emphasis on the cultural nature of the “1968” is misleading, because, as our study shows, by criticizing the modern society and the Cold-War regime of each country the “1968” prompted reorganization not only of the postwar regime of each country but also of the international regime of the Cold War.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2012 年度	2,130,000	630,000	2,760,000
年度			
年度			
総　計	7,330,000	2,190,000	9,520,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学、政治学
キーワード：比較政治、政治社会、政治文化

１．研究開始当初の背景

（１）戦後の先進各国の政治的展開の一つの大きな分岐点となったのは、1960 年代から 70 年代にかけての時期である。この戦後政治

の変化に接近するうえで、われわれが注目するのは「1968 年」である。「1968 年」については、これまで多くの研究において、先進国の政治文化に関する大きな転換点をなしていると指摘されてはきたが、これを今日の各国の政治のあり方との関連で、社会科学的観点から、また国際比較的視点を交えて分析・考察したものはこれまでほとんどなかった。90 年代末以降、欧米諸国では「1968 年」の国際比較を銘打った書籍が刊行されるようになったが、それらのほとんどは、各国において「1968 年」に何があったのかを並列的に並べているだけで、そうした傾向は、「1968 年」の 40 周年を機にこの間多数刊行された研究に関しても変わっていないように思われる。加えて、これらの研究において、日本についてはほとんど扱われていない。

（２）こうした傾向は、日本においてもそれほど変わりはない。日本でも、この間、多数の「68年」関連本が出版されているものの、そのほとんどがこの世代の回顧的叙述の域を出ておらず、あるいはそうでないものでもその関心の中心は、当時の学生運動とその思想にしかない。政治学の分野では、岡本宏編『「1968年」時代の転換点』(法律文化社、1995年）がこの問題の唯一といってもよい先行研究であるが、これは「1968年」自体の政治史的解明に考察が限定されており、「1968年」がのちの社会に与えたインパクトにかんする考察が十分に行なわれておらず、また、日本との比較のうえで重要と思われるドイツの分析が欠如している。つい最近出された小熊英二氏の上下2冊の大著(『1968年』新曜社、2009年）も同様の憾みが残る。

２．研究の目的

（１）「1968年」に関するこの内外における重要な研究の空白を埋めるべく、研究代表者らが重ねてきた共同研究から、それぞれの国における「1968年」の持つ「革命性」と、それぞれの国の「モダン（近代）」のあり方と間には密接なかかわりが存在しているということが浮かび上がってきた。

（２）そこからわれわれは、それぞれの国の近代と前近代、そして近代と現代（モダンとポストモダン）との結節点に位置している「1968年」のあり様とその政治的社会的反応を切り口にすることで、それぞれの国の政治社会の個性とその変容とをトータルに比較分析することができるという着想を得、「1968年」とそれが各国の政治社会に与えた影響をトータルに再検討することを通じて、先進各国の「現代」政治の特徴とそれを支えた社会的・文化的・歴史的条件を明らかにするとともに、先進デモクラシーを分析するための新たな比較の枠組みを構築しようと考えた。

３．研究の方法

大きく３つの研究課題を設定した。

（１）この間夥しく刊行された「1968 年」研究および近年欧米中心に急展開を見せる「70年代」研究のフォロー。

（２）これと過去の共同研究とを基礎にした70 年代以降の各国の政治的再編成の研究。

（３）先進国政治の新たな分析枠組みの提示。

具体的には、（１）（２）については、研究デザインに従って、各研究対象国・テーマごとに研究分担を行い、そして、その成果を持ち寄り（３）の検討を行うこととした。

４．研究成果

（１）我々の共同研究の基本的視角は、先進国の政治変容の結節点に位置する「1968年」を切り口にすることで、それぞれの国の政治社会の歴史的前提とともに、その変容、さらには変容の基本的構造をも把握することができるというものであった。それぞれの国の近代社会のあり方を告発した「1968年」は、そ

のことにより、それぞれの社会に大きな緊張をもたらすとともに、場合によっては社会の中から激しい反作用をも誘発し、それぞれの社会の現代（ポスト近代）のあり方を強く規定した。そのような意味を持った「1968年」を起点にすることで、それぞれの社会の近代の基本的性格とともに、その現代的転形のあり方の双方が明瞭に浮かび上がることになる。こうした視座のもと、日本、ドイツ、フランス、アメリカ、中東欧諸国、北欧諸国の比較研究を行い、それぞれのあいだの共通点とともに相違点、その相違の背景や意味を検討し、こうした視座の基本的有効性が確認された。それとともに、その国際的秩序に及ぼした意義についても検討を行った。

（２）研究計画の段階ではそれほどきちんと認識できていなかったが、研究を進めるなかであらためてその重要性が確認されたことは、戦後の国際政治はもちろんのこと先進各国の国内政治をも規定した冷戦というものが持った独特の重みである。単なる軍事的なパワーポリティクスに限定されない冷戦のイデオロギー政治的側面自体が、逆説的にもそれぞれの国の戦後政治に対する疑念を醸成し、それが「1968年」を一つの触媒として、戦後的秩序の再編を余儀なくさせたという点は、世界史において冷戦が持った複雑でニュアンスをもった意味を再検討する必要性を示しているといえるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　26 件）

①小沢弘明「新自由主義下の社会」安田常雄編『変わる社会、変わる人びと ： 二〇世紀のなかの戦後日本』岩波書店、査読なし、2012、211－229

②畑山敏夫「緑の社会というオルタナティブ ： 新自由主義でも社会民主主義でもなく」『生活経済政策』183号、査読なし、2012、24－28

③畑山敏夫「現代フランスの原発と政治 ： 原子力大国の黄昏か?」『佐賀大学経済論集』45巻4号、査読なし、2012、15-47

④堀江孝司「福祉政治と世論」宮本太郎 編著.『福祉政治』ミネルヴァ書房、査読なし、2012、85－110

⑤小沢弘明「新自由主義下の中東・北アフリカ」『現代思想』39巻4号、査読なし、2011、220－223

⑥堀江孝司「社会変動のなかの「ジェンダーと政治」：ミクロ政治、バックラッシュ、男女共同参画」畑山敏夫・平井一臣編『実践の政治学』法律文化社、査読なし、2011、125－149

⑦堀江孝司「ジェンダーの比較社会論・比較政策論と比較政治学――政策変化におけるジェンダー――」日本比較政治学会編『日本比較政治学会年報13号ジェンダーと比較政治学』ミネルヴァ書房、査読なし、2011、73－99

⑧野田昌吾「「１９６８年」研究序説」『法学雑誌』57巻、査読なし、2010，1－51

⑨畑山敏夫「政治的エコロジーの可能性-『エコロジー的近代化』を超えて」加藤哲郎、丹野清人編『20世紀への挑戦－民主主義・平和・地球政治』日本経済評論社、査読なし、2010、55－84

⑩安野正明「ヴィリ・ブラント首相候補の誕生」『ゲシヒテ』3巻、2010、査読あり、1－19

〔学会発表〕（計　9 件）

①畑山敏夫「現代フランスの原発と政治一原子力大国の黄昏か？」日本比較政治学会、2012 年 6 月 23 日、日本大学

②堀江孝司「日本のジェンダー平等政策・少子化対策と政治過程」日本選挙学会、2012 年

5 月 19 日、筑波大学
③野田昌吾「社会国家はいまどこにいるか」日独法学シンポジウム「社会国家要請とグローバル化する法実務の緊張関係」2012 年 3 月 24 日、大阪市立大学
④小沢弘明「近代日本における「西洋史学」の成立と展開」国際シンポジウム「近代転換期における東アジアの人文知性の伝統と変容」第 1 セッション「西欧学問の受容と東アジア世界」2011 年 6 月 10 日、成均館大学校・韓国
⑤野田昌吾「党改革と政権復帰――ドイツ国民政党の 2 つの野党期」日本政治学会、2010 年 10 月 10 日、中京大学
⑥堀江孝司「ジェンダーの比較社会論・比較政策論から比較政治学へ」日本比較政治学会、2010 年 6 月 20 日、東京外国語大学

〔図書〕（計 5 件）
①小沢弘明ほか編『移動と革命 ：ディアスポラたちの「世界史」』論創社、2012 年、247
②畑山敏夫『フランス緑の党とニュー・ポリティクス』吉田書店、2012 年、242
③畑山敏夫・平井一臣編『実践の政治学』法律文化社、2011 年、220
④田村哲樹・堀江孝司編『模索する政治　代表制民主主義と福祉国家のゆくえ』ナカニシヤ出版、2011 年、366
⑤Yasuno, Masaaki, Die Entwicklung des Godesberger Programms und die Rolle Erich Ollenhauers (Gesprächskreis Geschichte 87), Friedrich-Ebert-Stiftung: Deutschland, 2010, 60

６．研究組織
(1)研究代表者
野田　昌吾（NODA　SHOGO）
大阪市立大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：５０２７５２３６

(2)研究分担者
畑山　敏夫（HATAYAMA　TOSHIO）
佐賀大学・経済学部・教授
研究者番号：８０２０２３６５
神谷　章生（KAMITANI　AKIO）
札幌学院大学・法学部・教授
研究者番号：６０２６９７１９
小沢　弘明（OZAWA　HIROAKI）
千葉大学・大学院人文科学研究科・教授
研究者番号：２０２１１８２３
堀江　孝司（HORIE　TAKASHI）
首都大学東京・大学院人文科学研究科・准教授
研究者番号：７０３４７３９２
安野　正明（YASUNO　MASAAKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：８０２０２３６５

(3)連携研究者
野田　葉（NODA　YO）
龍谷大学・非常勤講師
研究者番号：
木下　ちがや（KINOSHITA　CHIGAYA）
工学院大学・非常勤講師
研究者番号：